

私の戦争体験

八女市 桜木 俊行

私は、国鉄鹿児島本線矢部川駅（現瀬高駅）に勤務中、昭和15年4月、現役兵として台湾独立山砲第5連隊に入隊。

その後、初年兵係教官野瀬少尉の誘いで中野の陸軍憲兵学校を受験、翌年5月同校卒業。

翌日、横浜憲兵隊本部附として陸軍憲兵兵長を命ぜられ服務、翌年6月1日伍長に任官。

日華事変勃発以来、挙国一致国民皆兵と国情世情騒然たる中、遂に同16年12月8日、太平洋戦争に突入し、翌17年4月18日、東京、横浜はアメリカ空軍による空襲で大分被害を受けました。

そのうち、中国、比島、ビルマ、タイ、ジャワ等に戦域は益々拡大、戦いはいよいよたけなわとなり、当時まだ22、3才の若輩だった私は、はやる心を押え切れず、増員令（憲兵隊では増員令という）が出る度に志願し、ようやく念願かなって同18年1月、東京、横浜、大阪隊編成の臺北派遣第5野戦憲兵隊附を命ぜられ、私は第9分隊配属となり、分隊長大塚少佐以下18名でした。

そして同年2月3日、宇品港より旅客船を改造した安幾丸に乗船、船室は上下2段に仕切られ、畳一枚に一人位の割当てで窮屈でした。

出航してから暫くたって大変な時化となり、船倉で横になってもごろごろ転げ、吐気や頭痛がして、弱い者は胃の中の物を、次には胃液を、最後には血を吐き、助けてくれとか殺してくれと騒ぎ、自分で自分の首を締める者も出る有様で既に戦いは始まったのでした。

出航してから10日目の2月13日にシンガポールに到着しましたが、曲りくねった入江を巡りめぐって栈橋に近づくとつれ、赤、青、黄他色とりどりの建物、椰子・ピロ樹等熱帯植物の陰が青々と澄み切った海面に映って、今まで単調なエンジンの音や広大な海原、暑さで腐る野菜の臭いを嗅いできた脳裏には、まるで龍宮か天国にでも行ったような美しさでした。

やがて船が栈橋に近づくとつれ黒豆のように点々と見えてきたのはインドネシア人の荷揚げ人夫で、全く色が黒いのびっくりしました。現地人とは初めての対面で感無量でした。

シンガポールに上陸した夜、空襲を受け出したが、翌朝トラックでジョホール水道を南下し、再び輸送船に乗り同年2月22日ジャワ島東北部にあるスラバヤに上陸しました。

船が無く、いらいらした気持ちで待ちに待つこと1ヶ月、ようやくニューギニア行きの船団が編成され、同3月22日朝、明元丸という万式の輸送船に乗り組み、ニューギニアに向け出航しました。

出航当日の午後、途中のバンダ海で連合軍潜水艦の魚雷攻撃を受け、乗っていた船は中央より真っ二つに折れて沈没、私は船が沈む少し前に海に飛び込み無我夢中で逃げ、漂流物につかまって泳ぐうちに夜となり、寒さと疲労のため、意識朦朧となりました。

『海行かば水漬く屍、山行かば草生す屍』と有名な和歌もありますが、その時私は『まだ死んでたまるか』と藁にもすがる一念と幸運で、九死に一生を得ました。

その後、アンボイナ島アンボンに上陸、翌日兵器、弾薬、被服等の支給を受け、上陸用舟艇に乗り、夜間航行のみでニューギニア島バボに上陸。また空襲を受けましたが、4月14日アール島トアル着、その後ニューギニアと豪洲の間にあるタニンバル諸島に着任。

広島師団西原部隊配属となり、軍規風紀の肅正・防諜・治安維持・部隊長護衛等に服務。タニンバル諸島は、マッカーサー元帥がいた豪州のポートダウインから飛行時間約1～2時間程の位置にあり、毎日の爆音で時にはボーイングやロッキードハドソン、ノースアメリカンその他の機種による爆撃で相当の被害を受け、サムラギの山中にいた高射砲中隊は応戦したため山形も変化し、草木一本残らぬ程の猛爆撃を受け全滅しました。

飛行機は上空からの急降下や椰子林すれすれに飛んで来るため、警報より爆弾が早い時もあり、皆爆音には常時神経を尖らせていました。

制空制海権を奪われ、進撃どころか蟹が手足をもがれたように身動きもできぬ状態の部隊では、被害を最小限に押えるため、飛行機から見えないジャングル内に宿舎を建て、移動しました。

しかし我々は職務上民家を宿舎とし、また人手不足のため要所要所に曹長、軍曹を長とする分遣隊分駐所を設置し、時には情報収集のため拳銃、軍刀を毛布に包み、徒歩または木舟で島々を巡察して回りました。

こうして戦いの行方や明日の命も計り知れぬく悔しさやいら立ちの中に長い年月が過ぎ、遂に終戦の詔勅が下り、当時私は離島勤務中であったため3日後に終戦を知り、本隊に復帰。

また民間人を隊長とする台湾人勤労隊も飛行場設営のため来ておりましたが、終戦と同時に日本人は全員部隊へ逃げて来ました。

そして部隊では「日本は負けても我々はまだ敗けてはいない。竹槍持ってでも最後まで戦う」と言う者も大勢いましたが、結局「本国が敗戦を認めたのだからこれ以上戦っても犬死になるだけだ」と諦めムードに変わりました。

しばらくするとオランダ軍が進駐、またアーヌルド少佐を隊長とする豪州軍も、日本軍の引揚状況視察のためやって来ました。

今後はどうなることかと心配しましたが、オランダ軍はまず武器弾薬の員数を報告させ、次に一ヶ所に集めるよう命令して来ました。

各隊共員数を内輪に報告していたため後で処置に困り、2～3隻残っていた船舶工兵の舟艇で余分の兵器弾薬を夜、沖まで捨てに行くのは大変でしたが、心配していた武装解除や捕虜扱いも無く精神的にも楽で幸いでした。

そして無装備となった日本軍は、住民が移動させられ無人となった1里四方位の島に移され、隊の人数に応じて区域分けがあり、タピオカ、エンバール等の芋類を植え、自給自足の生活をする事になりました。

食糧は芋を蒸した『ブーフク』というのを食べるだけで、1日1000カロリー余りの栄養分しかなく、時が経つにつれて栄養失調やマラリヤ熱病等に感染する者も次第に増えて来ました。

元来配属の西原部隊は広島出身で、郷里が原爆の犠牲になったことは短波無線で既に知っており、また「全員豪州へ送られ去勢されて死ぬまで使われるそうだと、もっともらしいデマも飛び、その上自殺者も出て、敗戦下の悲観的ムードが漂い始め、気持も次第に荒んで来ました。

そこで、このままでは大変なことになると部隊幹部は心配して、進駐軍を通じてマッカーサー司令部に陳情、予定より1年早く昭和21年5月よりアメリカの輸送船で引揚げが始まりました。

憲兵もようやく戦犯容疑者以外は引揚げを認められ、6月5日出航の最終便で和歌山県田辺港に復員しました。

京都駅では進駐軍兵士と日本の女性達が仲良く腕を組んでいたし、復員列車から見えた三の宮は何一つない殺伐とした一面の焼野原で、やはり日本は負けたんだと痛感しました。

復員後は進駐軍法務部からの呼出しで取調べを受け、また官公職追放令で国鉄も退職し、福岡県警察官採用試験に合格しましたがもちろん駄目でした。南方の後遺症であるマラリヤも10年近く治らず、時々40度位の熱が出て苦しみ、敗戦の辛さ、情なさがつくづく身に染みしました。

とにかく生きて帰れたことに感謝し、また国の人柱となって亡くなられた多くの人々の冥福をお祈りすると共に、『前車の轍を踏まず』と昔からの諺にもあるとおり、二度とあのような悲惨な戦争は絶対繰り返さないよう努力しなければいけないと思います。

最後に戦犯として刑死された隊長の長浜大佐や同班であった山ノ内曹長、またビルマで戦死した弟のことを偲ぶにつけ、せっかく生還できた幸運を大切に、また無駄にせず、悔いのない余生を送りたいと考えております。